

私たちが託す「形のない希望」

川口市立小谷場中学校 3 年 渡邊 仁心

「税」とは何か。その問いに、私は一つの言葉で答えたい―「希望」―だ。

私たちが日々の生活で接するものの多くが税によって支えられている。朝、私たちが通う公立学校も、出勤時に使う道路や信号も、地域の病院や消防署も。そこに共通するのは、誰かが払った税が、誰かの安心や命を支えているということだ。

しかし、それらはあまりに当たり前のように存在し、私たちはその価値を見落としがちになる。私自身も、税は「引かれるもの」としか考えていなかった。親の稼ぎからも天引きされ、どこに使われているのかも分からない。納得感のないまま支払う税に、不満さえ感じていた。

転機は、妹が生まれたときだった。健診、幼稚園、医療費の助成。両親は、育児と仕事の両立に日々苦しんでいた。その背後には多くの制度と支援があった。そしてある日、ふと気がついた。これは、見知らぬ誰かが納めた税によって、自分の家族が守られているという事実だ。

それは、自分もまた「誰かを支える側」にならなければならないという責任の目覚めでもあった。

税とは、社会の連帯を目に見える形にしたものだと思う。裕福な者がより多くを担い、困窮する者が支えられる。その仕組みがなければ、私たちは「強い者だけが生き残る」社会に逆戻りしてしまう。税は、そうならないための防波堤であり、まなざしを社会全体が共有するための装置でもある。

もちろん、課題がないわけではない。税金の使途が不透明であることや、非効率な行政の存在は、納税者としての信頼を揺るがす。しかし、だからこそ私たちは「払うだけ」の存在にとどまってはならない。知ること、学ぶこと、声を上げること。それがよりよい税制度を育てる国民の責務である。

税は「義務」であると同時に、「選択」でもある。どんな社会をつくりたいのか。どんな未来を次の世代に残したいのか。その意思が、税という形を通じて実現されていくのではないか。だからこそ私は、税を「取られるもの」ではなく、「託すもの」として考えたい。

今、世界は多くの課題に直面している。格差、災害、少子高齢化。それら全てに対して、税は社会の「応答力」となる。どんな時代にも、私たちは税を通じて助け合うことができる。

税とは、形のない希望だ。今日、私が納める税が、明日、誰かの命を救うかもしれない。その想像力を持ち続けること。それが、未来への希望に繋がるのではないか。